

Lines | 作中使用文

Saru Yotsutuji | 四辻さる

(Quoted in part from Kaoru Ohashi's memoir | 一部 大橋薫 手記引用)



那个女孩知道完美的距离，我们不会在对方的身体上扎针。它不会伤害我们。但它也会侵蚀我们自己以外的距离和时间，造成裂痕。あの子はお互いに針が刺さらない最適な距離を知っていて、私たち自身に傷がつく事はないんだけど、私たち以外の距離や時間に食い込んで裂け目を作る事もある。

「それって距離や時間ってこと？」

这不仅仅是声音，当然我们所看到的一切也都拥有扭曲和裂痕。我们理不理它，都可以。もちろん声だけじゃなくて、私たちが見ている景色の全てに歪みや裂け目があるのは当たり前で、そんなこと無視しちゃっていいし、別に無視しなくてもいい。

「そんなことを気にしなくたって生きていけるってことを私たちは誰よりも知っている。だから画面越しのあの子の部屋がひどく歪んでいることを、私は伝えない。実存なんてずっと昔に諦めたでしょ。」

在软绵绵的膨胀挂钟上，她甚至没有注意到，数字 13 已经出现从她作的縫隙中渗出了夜露，很烦人，但雨水不能加入横轴。即使是雨也不能做我们能做的事，这既是一个黑暗的希望，也是一个光明的放弃。ぐにやぐにやと拡張していく壁掛け時計に 13 の数字が現れた事もあの子は気がつかない。そしてさっきあの子が作った裂け目から染み込んでくる夜露はうざったいけど、雨は横軸を継ぎ合わすことができない。私たちにできることは雨にさえ不可能なんだって、その事実は暗い希望でも明るい諦めでもある。

「その橋が虹である可能性？その可能性と同じくらい、その橋が蜘蛛の糸みたいに細くて強い事もあるでしょ。虹のように実体のない、すぐ消えちゃうような橋よりも透明で強い蜘蛛の糸の方がいい。イコールなんてただの吊り橋だってことに誰も気がついていないのは勿体無いと思う。」

窗口里的是我吗？その窓に映っているのは私？.知道，这也是你。それもあなただって分かってたよ.一切一直都算是假的，一天你会变成真的！いつも偽物でもある日、本物になる事もあるわ！.但我从来没有把它撕开过。でもそれを引き裂いたことなんかないの

「あの子が、またはあなたたちが私を見ているおかげで私は存在しているけどあの子の針もあなたの針も私を刺すことができない。」

— 是的，我们总是欢迎你，回头见。
— うん、いつでもおいでよ、じゃあまたね

「でもその針が揺れた時、その揺らぎは風になるでしょ？そしたらその風は、私の睫毛を撫でるの。睫毛が揺れれば私は目を閉じるけど、もちろんそれは悲劇なんかじゃないわ！」



(1)- 2 状況説明

我不知道他的命令是什么，也不知道他的愿望是什么。我是唯一能证明这面镜子里的人是我的人。金枪鱼知道它在自己的身体里有多红吗？彼が遂行すべき命令が、または願望が、何であるかは分かりません。この鏡に映っている人物が私であると証明できるのは私しか存在しませんが、鱈は自分の血肉の赤さを知っているでしょうか。。

或者说，如果这是一个想象的空间，那么同步性是不可能的吗？然而你仍然可以当做你自己，成为龙蒿。呆在相机里是不可能的，对吧？即使咬住针的东西是一只夕阳下燃着的狗我相信我很快就会忘记它。

またはここが架空の空間だとして、シンクロシティは不可能でしょうか。それでもあなたがあなたのままでエストラゴンになることでさえカメラにいたままではできないでしょう？そしてあの針に食いつくものが夕陽に燃えさかる犬だったとしても私はきっと速やかに忘れるでしょう。

你如何阻止她变成两足动物或回到四足动物？你能带她去一个不是这里的地方吗？让我成为你的狗。他的同心圆和笑声在时间的重复中有什么意思？马上一切会远去，也会激烈接近。

今に二足歩行を手に入れる、または四足歩行に逆戻りする彼女を止める術は？ここでない場所に連れて行く事ができますか？私をあなたの飼い犬にして。繰り返されていく時間の中で彼の同心円と笑い声にはどんな意味がありますか？今に全てが過ぎかり、または激しく近づいていきます。



その時刻、思い思いに座り込む私たちには砂の混じった風が吹き、文字盤にある十三が立ち去るまでに何かを成し遂げなければならない気がした。

私がトマトを食べるとき、食べた分だけ世界からその存在が減っていくという側面に気付いた上で齧り付く歯を止めないのはそれを良しとしているからであったが、二千年五月、七歳を目前についにその咀嚼をやめた。手にはベルリンの壁の破片をしっかりと握りしめ、どう考えても青すぎる空に私は絵描きになると誓った。この永遠に開け放たれているであろう窓を見ている限り悪くない気分であった。

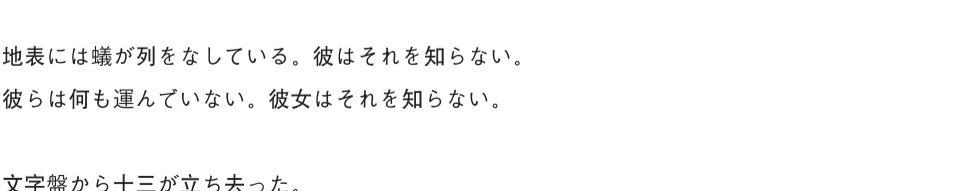
その結果、通りの向こうにある看板の文字が掠れて読めない事や張り巡らされた電線が雲を切り刻んでいる様を彼らと分かち合う事もせず、一秒間に二百回もの瞬きをして合図を待っていたが、そもそも全てのドアはノックもなく開かれるということを思い出してただ沈黙することにした。六時間後開かれたドアを見てこの風景は私のもの（事実）ではないとまた思い出した。そういえば新婚旅行で見た武漢の大橋も霞んで先までは描けなかった。

しかし当時は太平洋戦争がいよいよ重大局面に突入した時期で大学生に与えられていた特権も大幅に制限され、私は希望と期待に胸を膨らませて入学したのに先輩の中には私のやっていることを雑学と言って軽蔑するものもいた。

じきに経済は回復し、求職者の列もようやくバラの前にたどり着いたので、午前十時から午後十時、毎時最初の五分だけ質的調査を行った。今でも私はここで社会病理学者を名乗り続けている。

両膝を左右に開き、体の前で両足首を軽く組む。胡座で出来た私の三角形は彼の肘が織りなす二等辺三角形や彼女の肩の角度とピタリと馴染み、それらが合わさればもの柔らかな壁になった。

他人とは私以外の人、それはあなたであっても同じことだが、その認識のままに生まれた奇妙な多角形が愛しくてたまらない。それでも私は私と違う血があなたの中に流れることがいまだ理解できない。私たちがどうしようもなく、うっとりど、または陰鬱に、ここに居座り続けているのはこの壁が柔らかいからという理由に他ならない。



地表には蟻が列をなしている。彼はそれを知らない。彼らは何も運んでいない。彼女はそれを知らない。

文字盤から十三が立ち去った。一匹の蚊が私の右腕に吸い付いてきた。私の血を目一杯吸い出してほとんど私となったその蚊は、私の知らない場所へと飛び立っていった。残った右腕はアレルギー反応で爪の先まで真っ赤な斑点。